

宗教改革でカトリック教会はどう変わったか

山岡三治

山岡です。よろしくお願いたします。先ほどご挨拶いただきました水野先生と打樋先生、お二人とも何日間か一緒におつき合いさせていただいた機会があるので、非常に親しみを感じます。

水野先生とは、韓国で神学の教員の集まりがありまして、宿泊が同じ部屋でした。

打樋先生とは、富坂キリスト教センターの霊性についての研究会でいろんなところへ行く機会がありました。北海道家庭学校という少年たちの更生施設にもご一緒しました。

交わりの前進

昔は、そんな風にカトリックの司祭が牧師さん方と一緒に泊まったり活動したりすることはなかったと思います。今はそれができる時代になっております。

今年は宗教改革500年ですけれども、日本で宗教改革400年の記念の年は全然そうじゃなかったそうですね。カトリックの側では、何があっても関知せずというふうでした。そのときの様子は内村鑑三の講演とかの記録が残っております。ひたすらプロテスタントの側のお祝いでした。

今回は御校のようにカトリックの私を呼んでくださったり、他方でカトリック側の上智大学でも、宗教改革500年を記念して3つくらいのシンポジウムや講演会が行われたりします。この機会に交わりができているということを感じたいと思います。

交わりがこの500年の間に少しずつ前進しております。後退しないという、この言葉も今、エキュメニズム関係者の間でも標語になっているようです。後ろに行かない、前に行くだけだと。私たちもそのために努力したいと思います。

宗教改革でカトリック教会はどう変わったのか

それでは、宗教改革でカトリック教会はどう変わったのでしょうか。プリントが2枚ありますが、1枚の裏表は『カトリック生活』という、カトリックの一般信徒の人たち向けの雑誌に書かれたものですが、幸いに私が書かせていただいたもので、簡単に今のカトリックとプロテスタントの関係を説明しております。それが片面ですね。

もう片面は川村信三という、日本のカトリック教会では、今は一番優れた教会の歴史家と言われている方で、イエズス会の司祭ですが、御校の出身、関西学院大学文学部史学科の卒業生です。あちこちで活躍しておられて、よくその2つの教会の特徴をつかんでいる、とてもわかりやすい話をなさる方です。御参考にしていただければと思います。

もう一つのもは、今日の内容のスライドを印刷したもので、その中から幾つかを選んでお話ししようと思っております。そこで、話があまり固くならないように、まずは50年前の第二バチカン公会議の映像を見ていただきたいと思っております。

第二バチカン公会議

(映像開始。以下、映像を流しながらの説明)

第二バチカン公会議は、現代のカトリックの教会で一番歴史に残る大きな会議でした。世界の二千人の司教が集まりました。カトリック人口はいま世界で12億人います。世界の宗教で一番多いのがカトリックです。イスラムよりも多いです。映像で見ると、その会議はいかにも荘厳に始まっています。帽子をかぶっ

ていますね。ミトラといいます。魚の口の格好をしています。魚というのはキリスト教のシンボルで、イエス・キリスト、救い主を意味します。これが東方に伝わって中国で景教が使い、そして日本の仏教の高僧がかぶっているものにも影響したなんていう説もあります。

司教たちが荘厳に聖ペトロ大聖堂に入り、席についている様子が見えます。聖ペトロ大聖堂は五万人が入れる教会です。そこに世界中からの二千人を越える司教たちを集めて3年間会議をしました。

見てみると、何て事大主義などと思われるかもしれませんが、実は同じように今でもやっております。司教がミトラ帽をかぶっています。同じカトリックでも違う教派があったりしますが、その人たちは別のものをつけたりしております。それでもこれだけ統一できているのはバチカンが衣装を全部そろえたからです。

これは、外側から本堂に入る行列ですね。その行列を見るために世界中から信者が集まっています。これが行われたのは1962年。右に今、持って歩いている帽子、三重冠ですね、3つ重ねてある、あれは教皇だけがかぶるものでしたが、会議が終わったあとに廃止されました。できるだけ余計な装飾は避けるためでしょうが、それでもバチカンに行かれたらいろんな装飾がいっぱいあって、びっくりされると思います。

じゃあこれで、雰囲気を楽しむことは終わらして、お話に入りたいと思います。(映像終了)

第二バチカン公会議でカトリック教会は変わったのか

公会議はものすごく大きい集まりでしたし、相当のお金をかけてやったものです。その後、教会は随分変わったと思っている人たちがたくさんいました。「もう昔のカトリックじゃなくなった」とか「全てが新しくなったのだ」と。見えた変化が余りにも衝撃的だったからです。

ところが、そういう人が余りにも多いので、保守的な教義学の専門家であり

ましたラッツィンガー枢機卿、この方は後に教皇になりますが、彼のインタビューをまとめた本が話題になりました。とくにイタリアではピザよりも売れたと言われています。彼は言います。「第二バチカン公会議ですべてが新しくなったなどと言うけれども、そんなことはありません」と。第二バチカン公会議は今までの全部を捨てて新しくしようとした会議だという極端な人がいたのですね。また逆に超保守主義などの両方が出てきて混乱の様相を呈してきたのです。それに対してラッツィンガー枢機卿は、カトリック教会はそんなに変わってはいないし、変わるべきではないと言っています。実はそれは、カトリック教会は昔ながらのキリスト教の本来の本質、その教えをずっと継続して持ち続けているのだという意味でした。キリスト教が正統なキリスト教であるのはプロテスタント教会もカトリック教会も父、子、聖霊という、三位一体の教えを持っているわけで、それさえも捨てちゃおうなんて人もいたので、そうじゃないのだ、キリスト教の根本の土台は必ずしっかりと押さえてなければいけないと言おうとしたわけです。

変わったところと変わらないところ

プロテスタントの神学者で同時代に生きていて、意見を求められたりしたカール・バルトは、カトリック教会は随分変わったという印象を持ったようです。その主な点は何かということ、第一に、カトリックが聖書を大事にし、何を語るにしても聖書を引用し、聖書を根拠にしながら教える、こういう基本的態度をつけ始めたというところからです。昔はあまりそういうことがなくて、「教会がこう教えているから」「こういう習慣だから」とか言って、上から下へという感じが強かったのです。

第二は、プロテスタントと対話するときに、教会論から始めるのではなく、キリスト論的方向づけから始めるようになったことです。「教会とはこういうものだ」という前提で話し始めると平行線となり、がちが明かなくなります。プロテスタントの方々には司教がいません。枢機卿もいませんし、教皇もおりま

せん。教皇、司教、司祭、そして一般信徒、そのようなピラミッド構造から始めたら対話にならない。それよりも、まずキリスト教の一番本源であるイエス・キリストを出発点とし、それも聖書を根拠にしようとしているわけですから、喜んでいいわけです。

第三は司祭職についてです。昔は「万人祭司」という言葉が使われていましたが、今は「全信徒祭司性」という言い方を使っておりますね。「万人祭司」ですと、信徒でない人も入ってしまうのでふさわしくない言葉ですね。まず全信徒が祭司だと言うことですが、カトリックの場合は、ずっと教えてきたのは、まず司教があって、それから司教の中のトップの教皇がいて、それからずっと下の、ピラミッドの裾にたくさんの人がいるという考え方をしていたわけですね。でも、そうではないと。まず、教会というのは神によって呼び集められた神の民である。だから、たくさん羊が大きな柵の中に集められている。まず、そこから始まるわけです。だから、そこで少し変わってくるのが、そのたくさん羊を誰が責任をもって導くのかと、どういう資格で導くのか、になってくると違いが出てくるわけですが。まずは神の民、神の小羊たちですね、羊の群れ。そこから始めたことも大きな変化です。

第四は教会を開放するようにしたこと。カトリック教会は閉鎖的な状況でありました。プロテスタントの教会の方々が一生懸命カトリックにモーションをかけて、「一緒に教会について研究しましょうよ」とか、「世界の平和のために一緒に働きましょう」と、1910年以降からずっと声をかけてくれていたわけです。でも、それから40年ぐらいはずっと拒否しておりました、拒否だけではなくて、「プロテスタントの集会に出てはならない」と、そんな指示さえも出ていました。

変わってないところは、まずはピラミッド構造。教会はまず羊の群れ、神から愛された子供たちの群れだと言っても、やっぱりピラミッド構造が見えるじゃないですかと言われます。今でも教皇に会うためにローマにたくさん集まっています。聖ペトロ大聖堂の広場に何千何万もの巡礼者が毎週集まるわけですね。教皇が小さな車に乗って近くを通ると、もう大騒ぎです。それをたで見ていると、「これでいいのかな」なんて思ったりするのは自然だと思いますが、

その珍しさと、やっぱりその人格。教皇はやっぱりできるだけいい人を選んでいきますから、その人格にほれるというところもあります。巡礼者は「わざわざ遠くからローマまで来たのだ」という、その喜びもあると思います。私もつい5月に久しぶりに行ったのですけれども変わっていませんでした。

それからマリア理解も変わった部分と変わらない部分があります。第二バチカン公会議で説明の仕方が変わり、キリストを信じ、従う教会の姿としてのマリアを強調していますし、またそのあと50年の間に様々な説明の仕方がなされてきました。とくに聖公会とローマ・カトリック教会との間で合意したような説明も出てきました。でも、それらが実際に信者たちの間で実践されるようになるのは、まだまだ先のことであろうと思います。

聖餐について

パンとぶどう酒の式の理解は基本的には変わっていません。カトリック教会は相変わらず「実体変化」という言い方をしていますが、プロテスタント側からカトリックのこの理論を言うときには「化体説」と言っているようです。体が化けて変わっちゃうという、何だかちょっと聞こえがよくないので、カトリック教会の場合は実体変化という言い方をしています。

司祭がパンとぶどう酒を祝福するとき、「パンとぶどう酒はキリストの体になっており、もうパンやぶどう酒ではない」と言うわけです。そうすると司祭によって祝福された後は、聖なるキリストの体になるのですから、敬うのは当然です。ところが敬いかたが行き過ぎてしまうと迷信的な問題が起ってきます。

ルーテル教会では、一方で「キリストの体になる」とは言いながらも、他方で「パンとぶどう酒のその性質は残っている」という説明がされておりますね。見た目は本当にパンとぶどう酒ですから見えたままであることを保持しています。人間の五感に感じられることを無視しないわけです。そのような考え方が次第にふつうの人間の感覚や常識や合理的な考え方を受け入れていき、人間主義化していくようになると指摘する人もいます。

それから「犠牲」という説明も今でも使っています。カトリック教会に入りますと正面の十字架にはキリスト像が乗せてありますね、最近はどうでないものも随分あるんですが、特に西洋の中世の時代には血みどろの像のついた十字架を一番奥に置いて礼拝をすることが多かったです。バストやら戦争で多くの人が苦しんでいたという背景があります。プロテスタント側としては、「犠牲は二千年前のキリストのあの一回で終わっているはずであり、何でまたやるのか」という質問になるわけです。カトリック側の説明は、「その犠牲はキリスト論的犠牲でなくて、秘跡論（サクラメント論）で言っている犠牲であり、見える効果的な（つまり拝領する信者に洩れなく具体的に効果を生じる）シンボル（しるし）としての犠牲である」としています。

外側から見える変化

外側から見える変化の例としては、「司祭の特権としてのミサ」から「一緒に捧げる共同体のミサ」へという変化があります。かつてはミサのパンとぶどう酒が大事にされすぎて、それを扱う司祭が非常に聖なるものとされて一般信徒との距離ができてしまったことの反省から生まれています。その反省にもとづいて第二バチカン公会議以降の新しい教会堂の作りが変わってきました。それらは直線でなく、司祭をみんなで囲み、円形を作って共同体を意識させる構造になっています。

七つの秘跡（サクラメント）（洗礼、堅信、聖餐、叙階、ゆるし、婚姻、病者の塗油）の再解釈も行われました。カトリックの場合は長い千五百年、あるいは今までを含めれば二千年の伝統を重んじて、七つの秘跡が行われていますが、その説明の仕方は聖書に基づき、また共同体的な視点で説明されています。共同体を育成し、一致を促進するものとしての七つの秘跡です。またキリストの死と復活、再臨の教えもそれぞれに含まれるように説明されています。

ミサ用語については、中世のルター時代でさえもラテン語はほとんどの人がわからなかったのに、世界中が同じ典礼を使えるようにずっとラテン語でな

されていたわけですが、第二バチカン公会議後によくそれぞれの地域の言葉になりました。

典礼の執行の仕方もちつては非常に細かい手順がありました。そのときには指を曲げなきゃいけない、手を広げなきゃいけないとかかなり細かいしきりがありました。それらは非本質的なので、公会議後はどんどん簡素化されてきました。

かつてのミサの様子の写真を見ますと、第二バチカン公会議以前のものはすごいキンキラキンです。祭壇の奥に十字架があってそこで司祭がパンを捧げており、信徒たちがひざまずいてそれをずっと仰いでいました。司祭がいま祝福されたパンを手でささげている瞬間では、侍者が鈴をジャラジャラと鳴らしていました。そうするとみんなが、「イエス様」とか、「主よ」とかを心の中で呼んで、その式を見守るというものでした。歴史研究が進みますと、「これじゃいけない」というのがだんだんわかってきました。もちろん、みんなを代表して司祭がささげてはいますけれども、実はこのようなやり方では信徒は考慮されないんですね。なぜかといいますと、信徒がいてもいなくてもできるからです。

写真を見ますとこの祭壇の上に山ほど金色の祭具がありますよね。祭壇というのはユダヤ教の習慣を見ても、単に土であり石の板があるだけです。それがいつの間にかカトリックの中ではいろんな飾りが入ってくるんです。例えばここには花が右のほうに、あれは祭壇ではないんですが、よく祭壇の上に花がいっぱいあって、それから飾りのようなローソクを立てたような、あるいは聖人の遺骨のようなものが山ほどあって何が何だかよくわからないと、こんな様子でした。

日本でもその雰囲気がありました。写真の教会は随分いい雰囲気の教会だったんですが、昔の構造そのままなんです。たくさんの信徒はずっと後ろのほうで、「奥のほうでやっているミサを眺めさせていただいている」という立場ですね。そして、その祭壇の手前に柵がありますね。そこの先に信徒は入れなかったんですよ。聖域です。また別の写真は司祭になる式、叙階式の一コマです。一般の信徒は、その柵の手前で待っていて、祝福されたパンをいただくという形をとっ

ていますが、信徒が見るのはずっと上のほう、奥のほうにある、遠くを眺めているという感じのミサでした。

このように2つに分けてしまう。聖域と一般の人たちの場所と分けてしまう。それから信徒がいてもいなくてもいいような、そういう状況も生まれたわけです。これが、教会のさまざまなところに影響していたと思います。教会の運営もそうですね。物の考え方も全部、聖職者指導、特に司教による指導に固まっているというところがあったんです。でも、そうでなくていい場所もたくさん幾らもあるわけで、そういう分野もね、その辺の改良を少しずつしていくということです。

この写真は今のイグナチオ教会（東京）ですね。いかにも教会的なものから、今度は何だか石油コンビナートみたいな外観です。教会に初めて来る人は、駅を出てもどれが教会かわからず、尋ねたり、向かい側にある雙葉学園の母体のシスターの修道院がすごく大きな十字架が外から見えて、大抵向こうに行きます。

写真でおわかりのように祭壇をみんなで囲む構造です。ですから司祭はみんなと一緒にミサをささげるという考え方を表しています。これは大きな変化でした。この円形は広い草地でイエスがたくさんの人にパンを食べさせたという様子を思い起こさせるようにつくってあるそうです。この円形は教会運営にも影響してきます。昔の司祭は、信徒の意見も何も聞かないで全部決めていました。最近では信徒の意見を聞かないと全然運営が立ち行かないです。そういう非常に好ましい、司祭としては苦勞のある時代になっております。

それから最近ではカトリック教会も随分外に出て対話しようとするようになって、プロテスタントの方々に逆にビビられたりするというようなことも聞いたりしております。

神学校の司祭課程では「エキュメニズム」の科目が必修科目になっております。これを勉強しない限り司祭になることはできません。そういう意味で、エキュメニズムが非常に重視されていることもわかると思います。

変化のために教皇が果たした役割

カトリック教会は急に変化するのは難しいです。第二バチカン公会議の前夜ともいえる時期にだんだんと教皇が感じ始めたんです。教会は変わらなきゃいけないと。最後に引き金を引いてくれたのがヨハネ23世ですが、その前にピオ12世がいました。保守的な人でしたが、聖書研究とか古代教会の研究を奨励していました。

写真の一番左はそのピオ12世、次がヨハネ23世、それからパウロ6世という、この3人の教皇たちがとても大きな役割を果たしました。とにかく教皇が動くと、やはり教会が動くんです。教皇が動かないと動かない。ですから教皇選挙はカトリック教会のなかなか難しいところでもあります。世界中の100人から120人ぐらいの枢機卿たちが集まって選挙をするわけです。「コンクラーベ」と言います。これはイタリア語で「コンキアーベ」、鍵を閉めちゃいますという意味です。枢機卿たちを大きな部屋と、それから寝室なんかもちろんあるところと同じこめちゃうんです、外に出さないんです。終わるまで。最近ちょっと出てもいいという話も聞きますが、下手に出ると変な情報が入ってきたりして間違っただ人を選んでしまう可能性もあるのです。その場所が例の一番有名なシステリーナ聖堂ですね。むかしはイタリア系をはじめとしてラテン系の司教が多かったですから、やたら話が長くて全然進まないんですよ。それでだんだんと食事を減らしていく方法を考えまして、そのうちに、やっぱりこんな少なくちゃたまらないというので早く決めなきゃというので、それで決めるという時代もあったようです。かなり悠長な時代でしたね。

教皇はそのような形で決められていって、現代の場合は、その時代に適した人が選ばれているといえましょう。そして一番大事な変化のときにヨハネ23世が選ばれ、公会議の以前には脇にやられていた神学者たちを呼び戻して公会議の神学に中心的な役割を果たさせました。

かつてカトリック側からルターを批判していた人たちが陽の目を見なくなり、逆に理解する人が増えました。こうしてカトリックもプロテスタントをだんだん

ん理解していくようになりました。

近代まで続いていた反動的な時代

理解に至るまでは長かったです。1517年からずっと拒否し続けていました。トリエント公会議は1517年から随分時間がたち、1545年に開催されております。しかも閉会まで18年もかかりました。司教たちは会期中に自分の故郷に帰る必要もあったのですが、いったん戻ったら再びローマに戻れるか保証がありませんでした。たくさん疫病や戦争がありましたから。それで徹底した議論もできず、うやむやのうちに終わったと言われています。

この時代はどんどんプロテスタントが強くなってきましたし、カトリック教会に対する攻撃も強くなってきましたので、トリエント公会議は防衛的な内容になりました。でも、いい点もありました。1つは司祭養成課程の設立です。当時の神父の養成は非常に弱いものでした。司教さんの一存で、「こいつはいいや」と思ったらすぐ神父にしちゃったような時代でした。ところが、この時代以降になりますと、養成課程は、スコラ哲学から始まり、古代哲学とか認識論とか形而上学などの学問をきちんと踏まえてから、神学を4、5年やって大体10年ぐらいの時間をかけて神父になるような制度づくりをしました。とはいえ、それが本当に徹底するのはもっと後ですが。

トリエント公会議のあとは、1869年から1870年の第一バチカン公会議が開かれています。これはまた反動的で、教皇の不可謬性が宣言されました。また同じ公会議では、いくらたくさん司教いて、その会議体が決めたことがあるとしても、司教のトップのローマの司教（教皇）にまさるわけではないことが宣言されます。ただし、この教皇の不可謬はすべてについてではなく、「これは教皇不可謬である」という宣言を加えてやると不可謬になることになっています。最近の例で言えば、聖母の無原罪とか、聖母の被昇天のようなマリアの教義が宣言されましたが、「そこまでしなくてよかったのではないか」という人も多くあります。

カトリック教会の軟化から第二バチカン公会議へ

500年かけてだんだんとカトリック教会も軟化していきます。その第一の立役者はヨハネ23世です。とても人々に好かれた人です。76歳で選出されたんですが、すぐ死ぬだろうと思われて選ばれたとよく言われます。うしろに最高の候補者、のちのパウロ6世がほどよい年齢になるまでの「つなぎ」として見られていたのですが、あにはからんや、公会議を招集してしまうのです。普通なら76で何かやるなんて大変なことです。ヨハネ23世はローマ教皇として選ばれたとき、近くの部屋に「泣き部屋」があったということです。教皇に選ばれたときに、「自分は何という運命を背負わなきゃいけないのか」とひとりで泣くことのできる部屋があるという話もあります。

でもヨハネ23世は、教皇になってからすぐに決心をするわけです。彼はいろんな教派と、正教もイスラム教も、その時代の理神論者、汎神論者にも接触していました。教会に閉じこもってなかった人です。現代世界の危機感も十分に感じていました。あのころは東西の冷戦の時代でした。たとえばキューバ危機。キューバにたくさんの兵器が運ばれてきたので、ケネディ大統領は大きな危機宣言をしました。もしこのまま武器輸入を継続するならば、キューバを攻撃すると宣言しました。この頃私は小学生でしたが、親が「また戦争が始まるかもしれない」と言っていたのを記憶しています。

その時期に第二バチカン公会議が始まったんですね。世界中が冷戦、ソ連とアメリカとの間が冷え切っていた時代です。と同時に、大衆化の時代でもありました。夢も何とか与えようというので、ケネディ大統領が「月に行くんだ」という予告をしたりするわけです。

さてこのヨハネ23世ですが、先ほどはいろんな経験をしたということを申しましたが、76歳で、1958年に選出されて、翌年には公会議開始を予告します。公会議は準備するために2、3年かかります。それでやっと1962年に開催して、翌年に亡くなります。教皇が予告したときには周りの枢機卿たちは一生懸命、思いとどまらせるために努力したそうですが、始まってしまったわけです。興

味深いのはカトリック教会の信者数はそのときはまだまだぐんぐん増えていた時期です。開催反対者の根拠でもありました。けれども、本当の世界の現状と対応できていないカトリック教会の危機感をヨハネ23世はわかっていたようです。地上の平和のためにカトリックとプロテスタントは自らを世界に開かなければならない、今日化しなきゃいけないというところですね。アジョルナメントです。

ヨハネ23世が亡くなって、そしていろいろな指示書、教令が第二バチカン公会議の会議中に次から次へと出されたんですね。「聖書をこう解釈しましょう」「教会をこういうふうに解釈しましょう」という文書が出てきました。諸宗教についても、あるいはプロテスタントについても「こう考えましょう」というようなものが出るわけですね。でも出版しました、じゃあさよならじゃあないんですね。それを知らせなきゃいけない、世界中に。そこでどうしたかという、後継者のパウロ6世もなかなか賢くて、聖年を定めて世界中のカトリック信者がローマに巡礼するような仕掛けを作りました。公会議が終わった1965年からの1年間を聖年と決めました。聖年のその年にローマに巡礼する人は特別の恵みを受けるといって、それを聖年の特別なゆるし、一種の贖宥ですね。だから、贖宥ってよくルターが批判しているものの、初めから何もしないで罪をゆるされるといってではなくて、懺悔のあのゆるしの秘跡で、ちゃんと自分が告白して、普通その後、こうしなさい、あしなさいという償いが与えられるんです。その償いの免除が贖宥です。お金でそれを償い終わりたいという気持ちも出ます。結構長く厳しい償いがありましたから。

でも、そういうものですけども、彼らの場合は、ローマに世界中から集まり始めたんですね。そうしましたら、必ずそのローマに集まってくる人たちに、世界中から集まってくる人たちに第二バチカン公会議の精神を10分、20分ぐらいの話で説明するんですね。それを毎週続けたんですね。そうすることによって、その内容を自分の国の人たちに伝えていって、だんだん広がっていったわけです。

第二バチカン公会議ではプロテスタントは「主における兄弟」とか「別れた兄弟たち」、という言い方をしております。その後、プロテスタントとカトリックの関係について幾つも文書が出されましたが、教皇の文書とかバチカンから

の文書とかいろいろ優劣がありまして、序列があります。いちばん大事なのは教皇の名前で発信される「回勅」です。教皇自身がサインをして出すもので非常に重いんです。

共通の洗礼

カトリックの流れの変化というのはよく、石油を運ぶタンカーに例えられます。大きな海を渡っていくときに方向を変えるという、こちら側でかじ切るところでかちっと変えても、実際に航路が変わっていくのはずっと先です。ですから、時間がかかりますが、上の方の人たちが実際に舵をとり始めれば何とか動いていく、そういう面があります。

カトリックとプロテスタントの歩み寄りということを考えますと、ひとつの例は、プロテスタントからカトリックに移る時の場合です。逆ももちろんいるわけですが、プロテスタントから来る場合も洗礼はそのまま有効です。そのまま受け入れます。さらに要求されるのはカトリック教会に忠実を誓約することが必要というところがありますが、とくに決まった式文があるわけではなく、プロテスタントが持っている同じ使徒信条を唱えてもらいます。洗礼式式次第には「洗礼は、前の教会の洗礼を受け入れ、再度洗礼を授けてはいけない」とはっきり書いてあります。ただし、「条件つき洗礼」というのは認めます。なぜかというと、「プロテスタントで洗礼を受けました」と言いながら、どんな洗礼かあまり記憶していない人がいるんですね。「ミルクをかけられました」とか、「水を肩にかけられただけです」とか言われたら。「条件つき洗礼」を授けます。「念のため洗礼」とでもいえるでしょう。どちらかが正式なものであり、二つ受けてもひとつだけが洗礼です。

プロテスタントの場合では、同じ教団、例えば日本キリスト教団を見ますと、再洗礼派以外の教会の出身者が、再洗礼派のほうに移ると、幼児洗礼を受けた人はもう一度受けなきゃいけない、そういう例も聞いたことがありますので、かえってカトリックのほうが近いのかなという感じがしないわけでもないです。

去年ルンドで共同声明があり、「私たちは洗礼という共通の基盤から出発するんだ」という内容でした。そういうことを考えても、将来ひとつとなる条件は次第に整ってきているのではないかと思います。

教皇の象徴的な活動

写真にありますように、教皇ヨハネ・パウロ2世は西暦2000年には「ゆるしを求める祈り」をはじめました。ユダヤ人に対して、プロテスタントに対しても、それから女性や少数民族の人たち、そういういろんな対象が挙げられました。それぞれに対して、「私たちカトリック教会はゆるしを求めます」と。「もし私たちがそういう人たちから何か害を受けたならば、こちらもちろんゆるします」という宣言をしました。さらにひとつの写真はナチスの強制収容所のあったグッハウですね。ここでたくさんの人が殺されました。その写真に見える丸い塔がありますが、その塔は、その当時ポーランド人のカトリック司祭は九千人いたのですが、そのうちの六千人が収容所で殺されており、モニュメントはその追悼を意味しています。その1つ道路を隔てて向かいの敷地にカルメル会女子修道院が建てられております。観想会（外に出ない修道院）です。20人ぐらいの女子修道者が生涯そこにとどまって祈っています。

それから政治に対しても行動しています。ブッシュ大統領がヨハネ・パウロ2世に謁見したときかなり厳しいことを言ったそうで、ブッシュ大統領がそこから離れるとき、すごく真剣な顔していたそうです。教皇暗殺を企てた囚人も会ったりしました。「ゆるします」という象徴的行為です。これは平和のための教育でもありました。ヨハネ・パウロ2世は亡くなる前に、「自分のお棺を簡素にしてくれ」と言ったそうで、写真のように木のお棺でした。

左側の下の写真は、上からお棺と周囲の枢機卿たちを撮影したものです。ひざまずいている人は、ブッシュのお父さんと息子大統領がいますし、右側にクリントン大統領がいます。教皇の葬儀には、世界中の要人が来ておりました。ほとんどがトップの人。別にキリスト教多数の国ではなくてもトップの人を送

りました。不思議なことに日本は元外務大臣川口さんだけでした。日本は弔問外交の貴重な機会を失ってしまった。これで日本は相当馬鹿にされました。外務省もすごく面子を失ったのです。

正教の大事さ

エキュメニズムを考えるので忘れてはいけないのは正教、オーソドックスですね、ギリシャ正教とロシア正教についても言っています。正教についての教令の中で、「正教とカトリックは両方の肺」だと言っています。というのは、昔から兄弟として同じ信仰を持ち習慣を持って今まで来ていると、そういう内容ですね。

ですから、そういう意味で、正教には特別な待遇をしております。カトリックの場合は、プロテスタントと対話をするというとき、いつでも正教との対話を念頭に置いております。ですから、女性司祭というのは当分ないだろうと思います。正教に司祭の結婚があるとしても、聖書時代の司祭が男性であったその様子を忠実に引き継ごうとしていて、多くの司祭がヒゲをはやしているのからわかるように、女性司祭はまったくあり得ないと思いますから。

カトリック教会が求めるのは「完全な交わり」であり、意味するところはヒエラルキア（ピラミッド構造）をどう持つかということでしょう。とはいえ、カトリックが行っている全部を受け入れたらそれでカトリックだということではなくて、基本的にプロテスタントとカトリックの共通している洗礼とか三位一体の信仰とか、それを受け入れれば今の現代のカトリック教会はその人たちを受け入れるんですね。「おいおいわかるだろう、わからないままならそれでいいでしょう」と、そんな感じがあります。

結論として、じゃあカトリック教会は変わったか、変わらなかったか。非常に難しい問題です。変わった部分は、できるだけ構造的に動かしやすいもの。例えば信徒主導の教会運営は各地域で進んでおります。聖餐理解は昔どおりですね。ただ、あまりにも聖体を大事にし過ぎるとしたら問題があるので、そう

いうのはできるだけ避けるようにする。昔はその聖餐、パンだけを礼拝する行事がたくさんあったんですね。今は、ローマにはまだ残っていますが、非常に少ないです。少しずつそういうのは流れに、時代によって移っていくことだろうと思います。でも本質は、一番初め、ラッツィンガーが言ったように、変わることはない。それがあつた限り、お互いに交流ができるのではないかというのが一応のこちらの今の状況の報告であらうと思います。

ひとつになるように向かわせていく環境

先日ルーテル教会の神学者であるディーター先生がおっしゃっていましたが、だんだん私たちはひとつにならざるをえない環境がそろってきています。外堀が埋められつつあります。第一の例は、キリスト教迫害によるものです。迫害者にとっては、カトリックもプロテスタントもありません。キリスト者であるということで迫害するのです。キリスト者以外にはその区別は気にならないのです。第二の例は、プロテスタントもカトリックも、かつてのような住み分けではなくて、同じ地域に混ざって住み始めてきているので相互理解がしやすくなっていることです。共住や近隣は相互理解を生む可能性を持っています。エキュメニストのディーター先生はカトリック司祭と一緒に住んでいるそうです。第三に、「教会離れ」という共通の危機的現象です。現代の人たちが教会を離れていくので、カトリックとプロテスタントが力を合わせて、知恵を絞って、なんとかしなくてはなりません。教会離れは、混宗婚のときにも起こります。教会で結婚したくても、どっちの教派でも挙式できない。「じゃあ、どちらも行くのをやめよう」となって減っていってしまう。こうして共通の問題がいろいろ出てきているということも、エキュメニズム推進のための遠いきっかけにはなるだろうと思います。

時間が来てしまいました。これで終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。